

高専に入学すると、1、2年生の頃に大学と同じ内容の勉強を習うなど、レベルの高さに驚いた。3年生になると、混合学科から学科別のクラスになり、あまりなじみず、1人で勉強をすることがほとんどであり、自力で勉強をすることに限界を感じた。しかし、後期からは一緒に勉強をしてくれる友達ができる。その子の勉強方法を見ていると、教員や周りの人の力を借りて、その問題に対して悩んでいる時間が短く、効率のよい勉強していた。特に電子回路という科目は難しく、友達同士集まって勉強しても解けず、教員の研究室に通って教えていただくようになった。そして、勉強方法を変えたことでずっと憧れていた席次一桁をとることができ、大きな成長を感じた。またインターンシップでは、業務内容と授業内容の関連した箇所も多くあった。自動化するためのプログラミング言語、動作確認の処理の過程で使われていた、制御工学で学んだフィードバック処理、海外との取引も盛んなためメールでは英語を頻繁に使用していた。インターンを通して、授業で学んだことを目の当たりにすることができ、成績や席次だけでなく、将来も意識して勉強に励むようになった。一人で勉強するよりも、仲間同士で勉強した方が効率よくできることを切実に感じた。うまく周りに助けを求めるスキルはきっと社会に出てからも大切なことだと思う。会社に入れば右も左も分からないことだらけである。学生生活で学んだ沢山の知識や勉強内容よりも、課題や問題を解決できる近道を知っていることのほうが重要である。それを活かして、社会に出てからは、さらにその仕事内容に応じた専門知識を身につけたいと考える。

4年生から5年生にかけては就職活動を行い、インターンシップをきっかけに将来を考えるようになった。私は沖縄出身のため、まずは県内就職か県外就職のいずれかである。そこで私は地元企業に就職を決めた。周りのほとんどが県外就職の中、私も県外に出ているいろいろな刺激を味わいたい気持ちもあったものの、将来を考えると地元に残り、実家からも近い職場に決めた。将来とは、やはり家庭を持つ、子供を持つことである。親戚の赤ちゃんをあやしていると、赤ちゃんを育てることは本当に大変である。常に赤ちゃんを見ておかなければならず、周りの支えが大切だと感じた。そして一番の理由は地元貢献である。私の就職先である流量計メーカーの工場では手作業が多いものの、自動化も積極的に導入を進めている。例を挙げると、製品の検査は自動で行い、製品を検査台に乗せる作業は人の手で行うため半自動化である。そして全自動化する際、ロボットのプログラミングが肝であり、授業で学んだプログラミングを会社で活かすことができればと思う。私の就職先の沖縄工場は、地域未来牽引企業に選定されている他、県内外の政治家も工場に訪れるなど、県内企業の中でも抜きん出て期待されている。そんな会社の業績向上を通じ、故郷に貢献できることは、私にとって非常に嬉しいことである。そこで自身の働きや努力が業績向上に繋がるようなエンジニアになりたいと考えている。

5年生になった今は卒業研究に力を入れている。卒研を始めたころは、行っている研究のゴールが何なのか、何のための実験なのか分からないことがほとんどだった。最初はスパッタ装置の原理を理解し、次に共振回路を理解するなど、一貫性がなかった。しかし、卒研を進めていくにつれ、スパッタ装置で作成した SAW 共振子を理解するためのことだとわかり、第5世代移動体通信システムのためのフィルタの特性向上のためだと分かった。別々の視点から、少しずつ理解してきた事柄が増えるにつれ、断片的だった話が繋がり全体が見えるようになってきた。私は先輩の引き継ぎの研究だが、先輩が行った実験を再実験しても違う結果になることがある。どちらが正解かは分からないが、発表の場で頂く指摘を積み重ねることで正しい結果に近づいていこうと信じて進めている。そして、先輩技術者達が築き上げてきた技術に自分の研究を重ねることを目標に取り組んでいきたい。

中学時代はぼんやりとした将来像しか持っていなかったが、高専の学生生活の中で私は自分の将来について展望を持つことができた。会社の社員の方々や地域の方のコミュニケーションを大事にして専門知識を身につけながら、故郷を支える企業で活躍できるエンジニアになりたい。